事後評価報告書(日本-韓国研究交流)

1. 研究課題名:「消化管疾患を標的とした基礎研究」

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者:大阪大学 免疫学フロンティア研究センター 拠点長・教授 審良 静男

2-2. 韓国側研究代表者:国際ワクチン研究所 粘膜免疫学部門 部長 Kweon Mi-Na

3. 総合評価: (A)

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

日韓で同一遺伝子改変マウスを用い、日本側は小腸粘膜の免疫反応の関連細胞サブセットを同定し、韓国側は疾患モデルの解析を実施しており、双方の研究分担・棲み分けが旨くかみ合っていた点は評価される。本研究交流の期間内に、日本側は樹状細胞の機能サブセットに関する優れた研究成果が多数得られている。一方、韓国側は *in vivo* の実験系のためか解析中のものが多く、その成果が日本側の研究に充分反映されていないのは残念であるが、今後、この研究交流がさらに発展することが期待される。

(2)交流成果の評価について

国際共同シンポジウムの開催や若手研究者の国際交流に貢献したことは高く評価される。もっとも、IFReC と IVI が主催した日韓国際合同シンポジウムの一環としてではなく、当該日韓グループを中心としたワークショップとして開催しても良かったと思われる。

(3)その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

本研究交流は日韓間の研究体制が適切に組織化されているが、共同研究の成果としての論文が少なく、韓国側の貢献度は現時点では充分でないと思われる。韓国側のウイルス感染の解析結果をより把握した上で、その先の研究展開がなされた内容であればなお良かった。今後も継続して成果をあげることに期待したい。これまでの日本側の研究成果は膨大ではあるが、本研究交流に於ける成果であることをより明確にして報告することを希望したい。